

走り続けて

「世の中で一番楽しく立派なことは、一生涯を貫く仕事を持つこと」という有名な言葉とともに、父が私に残してくれた「漁夫生涯竹一竿（いっかん）」と

私の履歴書

江 頭 匡 一
え がしら きょう いち

30

いう言葉の意味をしみじみと感じている。思えば、私も三十代初めに、「飲食業を立派な産業に育てることを一生の仕事にする」という志を立てて以来、ただひたすら走り続けてきた。友人の四島司福岡シティ銀行頭取からは、「あなたの生き方にはハンドルに遊びがないです

ね」とも言われた。私は「あなたには二世だから、遊びの部分を持っているけれど、創業者だったお父さんには遊びなどなかったと思いますよ」と言い返したものだ。言われてみると、確かに「遊び」がなかったかもしれない。だが、これまでたどってきた道には満足している。

その道を、いつも一緒に歩んでくれたのが妻の憲子だ。「夫婦相よって命をなす」という言

我が人生に悔いなし

家族・社員らの支えを力に

葉が好きだが、私が苦境に立たされたときには、家内がいつもそばにいて「もともとゼロから出発したのだし、あなたならきつとやり通せる」と私を勇気づけ自信を持たせてくれた。この十一月で五十三回目の結婚記念日を迎えるが、結婚記念日に写真を撮り、家族や親しい友人と一緒に食事を取るのが、私たちの決まりになっている。

わが志に向かって必死だった

がゆえに、ロイヤルの幹部や社員たちには、常日ごろ厳しい要求をしてきたと思う。その彼らが、私が還暦を迎えたときには、ホテルでお祝いしてくれた。「ワッショイ、ワッショイ」と担いでもらったときには、涙を流してえらく感激したものだ。また六十五歳で社長の座を退



自宅の庭で憲子夫人と

設計は副田道夫氏とともに、表には彼に「やすらぎ」と書いてもらった。死は私にとって大いなるやすらぎで、死がやすらぎでなくなったときは、仕事を怠けているときではないかと考えたからである。

城山三郎氏の小説「外食王の飢え」では、私がモデルという倉原礼一は、子供をネパールに訪ねて、帰りに車でがけから落ちて死ぬという筋書きになっているようだ。

今から三十数年前に、四島一三翁からの「生前にお墓をつ

(ロイヤル創業者取締役)